

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑫ 再びスサノオとイソタケル

三井 淳

イソタケルはスサノオの子というより、寧ろ分身としての性質が強いということを、専ら平田篤胤の解析に依拠して述べてきたが、これとは全く別の観点から、スサノオとイソタケルの関係を捉えられないだろうか。

スサノオは本来「スサオ」なのであって、それは新羅二代王南解（ナムヘ）の王号「次次雄（チャチャウン）」の一方言「ススウ、ススン」に通じるという説が江戸時代からあり、現在でも有力な解釈の一つである。「ススウ」の原義は「巫（ふ・かんなぎ）」であって、これは神をおろす、神の意志を伝える人のことである。つまり神に一番近い所にいるのだから一番偉い、従ってそれが人王なのだという、祭政一致の時代の、族長というものに対する素朴な尊敬心に根差している訳だ。

「ススウ」はそれ自身が尊敬語なのであって、子とされるイソタケルが「伊西（イソ）の勇者、王」という現実の地名を負っているのに対し、父としては余りに不釣り合いである。しかしここで発想を全く変え、スサ（ノ）オをイソタケルの修飾語と考えてみてはどうか。「父スサ（ノ）オ、子イソタケル」の縦の関係は、本来は「スサ（ノ）オたるイソタケル」という一体のものではなかったか。その意味するところは、「巫たるイソタケル」「祭政を行う、王たるイソタケル」、極言すれば、「聖なるイソタケル」という言祝（ことほぎ）ではなかったのではないか。通常スサノオの事績とされる伝承は、全てこれイソタケルにまつわるものだったのであり、スサノオ伝説・神話の確立とは、イソタケルの忘却、あるいは冠（かんむり）修飾語であった「スサノオ」の遊離独行ということになる。

修飾語の独り歩きの際に、特殊訓みあるいは新造字の確立が挙げられよう。例えば、「飛ぶ鳥の明日香（とぶとりのあすか）」という慣用句から「飛鳥（あすか）」という訓みが生まれ、「日の下の草処（ひのものとのかさか）」から、人名としての「日下（くさか）」の字が作られるなどである。

残念ながら、「素戔鳴」と書いて「イソタケル」などという訓みは成立しなかったが、ともかくにも、イソタケルという神は、人口（ひとくち）に膾炙（かいしゃ）するほど浸透しなかったのだろう。

（五十猛歴史研究会会員、みつあいあつし）

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑬ スサノオの上陸地

三井淳

スサノオの上陸地として知られるのが、石見との境に近い山口県の須佐（すさ）である。今は萩市に編入されているが、もともとは阿武（あぶ）郡須佐町といった。

標高五三二、八Mの高山（こうやま）のふもとに広がる須佐湾は県内屈指の良港であり、中近世には朝鮮貿易の拠点であったというが（平凡社歴史地名大系36「山口県」613頁）、そもそもの位置取りからして、半島との関係は須佐の宿業（しゆくごう）たるべきものだろう。

高山（こうやま）は本来神山（こうやま）といって、スサノオがこの山を目途（もくと）に入湾したのだといういわれは、佐比売（さひめ）山を頼りに、スサノオの一族が神島（かみしま）、子神島（こがみじま）、神上（しんじょう）を経て、大浦の浜に上陸したという五十猛町の伝承と同質である。

五十猛にもスサノオが上陸したという伝承があるものの、町名は「イソタケ」に納まった。つまり、この地に上陸したのは本来スサノオではなく、イソタケルを号するものであったことを言い表している。となれば、山口県の須佐にはスサノオが上陸したが故に、「須佐」を頂いたのである。山口県には、須佐はおろか、県全体について今の所イソタケルにまつわる伝承がまるで伺えない。この意味するものは何かと問われると、確（しか）たる解答に苦しむが、こういうことは言えるかもしれない。

須佐の地にスサノオを頂く集団が渡来してきたのは、「スサ（ノ）オなるイソタケル」の上部スサ（ノ）オが遊離独行した後、あるいは本体のイソタケルが忘却された後のこと、であったかもしれない。要するに、須佐の渡来びとは、五十猛の渡来びとより遙かに新しかった「今来（いまき）」の部類だったのではあるまいか。

それと今ひとつ、朝鮮神である「スサ（ノ）オ」号の伝来は、イソタケルノカミ示現より遙かに古かった節（ふし）がある。水野祐博士は、仁徳天皇の諱（いみな）「大鷦鷯（オサザキ）」や、武烈天皇の「小泊瀬椎鷦鷯（オハツセノワカサザキ）」の「サザキ」は、「スサ（ノ）オ」と関連があるという（井上光貞著、中公文庫「日本の歴史（一）」376頁）。となればイソタケルとは没交渉に、「スサ（ノ）オ信仰」が伝わっている可能性もある。

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑭ イソタケルノカミの成立

三井淳

ここで根源的な疑問に立ち返らなければならぬだろう。イソタケルがはたして、六世紀新羅の大將軍異斯夫（イサマラ）がモデルであったとして、ならばなにゆえヤマトの勢力を尽く加羅の地から追っ払った張本人、本来憎んで余りある敵將を神として崇め奉らねばならなかったのかという、古代日本人の心理についてである。

古代人が、ある事象なり人物なりを神として祭りあげる心理というものは、必ずしも崇拜の念とは限らず、それこそ複雑怪奇であって、現代人には容易に理解出来るものではない。最大の謀反人である平将門を、平安朝は最終的に神田大明神に合祀しているが、これは将門斬首の後、やたら異常事続発して、人々は将門の崇（た）りじやと心底（しんてい）これを怖れた挙句の始末なのである。拭いされざる恐怖の記憶は、後世に様々な影響を及ぼすらしい。霊だ鬼だなどと、人は理解不能の様々事象に思い馳せては深からの恐ろしさに震えあがる。しかし、住々それは畏敬の念に転換させする。「祝（いわ）う」と「忌（い）む」という音の近似するものの、意味が正反対となる言葉がある。ところがこの言葉は、元々同源であるそうなの。

イワウとは祭るとか寿（ことほ）ぐの意であるが、イムは嫌い、にくむの意となる。しかしこれはともに凶事汚穢を避け、万事を慎むの意で、神に仕えることに用いられた言葉であったという。そして両語に共通の語幹「イ」は、「神聖・呪力のある状態」を言うものであった（以上は真弓常忠著「神道祭祀」26〜27頁より。朱鷺書房刊）。こういわれると、この上なく憎い敵に対する感情が、なんだかはなはだ憚（はばか）られるものとして、いつの間にか仰ぎ見るようになる、そのような心理の逆転現象を、理解出来なくもない。

敵を崇める事例は、実は近代でも見いだせる。日露戦争の最終局面、連合艦隊所属の一水雷艇長は、敵艦撃沈すべくなんと願を李舜臣（イスンシン）に懸けるのである。李舜臣こそは、豊臣秀吉の水軍を悉（ことごと）く海の藻屑（もくず）と化した、李氏朝鮮最高の海将だった（以上司馬遼太郎「坂の上の雲」文芸春秋、より）。敵にせよ味方にせよ、人は本能的に強い者が好きなのである。

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑮ 任那と加羅

三井淳

任那（みまな）とは、何を意味する言葉なのかという点と、二通りの意味があったらしい。一つは南部加羅諸国の中心であった現在の金海（キメ）の別称であり、今一つが、加羅全体（新羅と百済に挟まれる一角）をも言う場合の任那である。

「任那（みまな）訓み」の誕生の経緯については、鮎貝房之進の諸考（国書刊行会「日本書紀朝鮮地名攷」）が依然有力である。金海（キメ）は元来須那羅（スナラ）と呼ばれ、その外港を「主浦（ニムラ）」といった。古代の韓国語では「主」の訓は「ニム」となるが、倭人は「任（にん）」を以って「ニム」に当てた。「ニ」の音は不安定で、往々「ミ」となる。意識して発音してみればわかるが、「ニ」と「ミ」は口びるを半開きにするか、くっつけて発音するかで差異に過ぎず、交換しやすい音なのである。土地を表す語尾のラはヤやナに変化することがある。結果ニムラ→ミムラ→ミマナの転変となったという。主浦（ミマナ・任那）は須那羅等加羅諸国へ向かう倭人の初踏点として重要視され、やがて須那羅のみならず、加羅全体をも倭人は「ミマナ」と呼ぶようになった。（以上鮎貝説）

三国志東夷伝弁韓条【弁の韓訓が、加羅（カラ）】に、「国鉄を出だす。韓、濊、倭皆從いてこれを取る」とあり、任那の本称である加羅には、三世紀頃既に多くの倭人が住みついていて、それは専ら加羅鉄を渴望する余りの衝動であったことが分かる。がそれにもまして、加羅とヤマト（倭の統一政権という意味で）はほぼ共通の開国説話を有していることに注目すべきで、両国は源（みなもと）を等しくすると言っても過言ではない。

三国遺事紀異第二「駕洛国記」に、初代王首露（スル）が、亀旨（クシ）に降臨したことを伝えている。駕洛（ガラク）は加羅のことと、ここでは金海（須那羅）を言う（朝日新聞「完訳三国遺事」192頁）。同じような話しが日本書紀にもあり、神代下第九段の一書（あるふみ）の第一では、皇孫瓊瓊杵尊（ニニギノミコト）が、日向の高千穂の楳触峯（クジフルダケ）に降臨する。楳触の「クジ」は加羅の「亀旨（クシ）」と一致する（岩波文庫版日本書紀第一冊分三七二頁、補注二ノ十三）。

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑩ 韓神（からかみ）

三井淳

ほぼ同様の始祖神話を有し、経済的にも鉄という太い紐帯（ちゆうたい）で結ばれていた加羅からは、様々な文化が伝わっている。その一つに「韓神（からかみ）」がある。

上田正昭博士の研究によると、韓神はかつて平安京宮内省の重要な祭祀であり、現在でも「三島木綿（ゆふ）肩にとりかけ われ韓神の韓をぎせむや・・・」という神楽歌が残っている（三一書房「日本庶民文化史料集成1」上田正昭著）。上田博士によると、「韓（から）をぎ」とは「韓風の神おろし」を意味するといひ、海上から韓神を招来することにほかならない。

韓神とは古事記に出てくるササノオの孫のひとりで、兄弟神に曾富理神（ソホリノカミ）がある。この韓神、曾富理神につき、平田篤胤は、

平田大人ハ、内侍所御神楽式（ないしどころみかぐらしき）ト、太宗秘府略記トニ依リテ、此ノ二ツノ名ヲ五十猛神ノ亦ノ名ト決メテ、サテ古史伝（平田篤胤の著書）ニ「五十猛神と申す義は、韓國伊太氏神とも申す如く、蕃國々（からくにぐ）に渡りて還り給へれば、称（い）へり・・・」（岩波書店、那珂通世「外交釋史」219～220頁（引用））

として、日本書紀のイソタケルノカミに相当すると言っている。

大田市五十猛町大浦地区の氏神を「韓神新羅神社（からかみしらぎじんじや）」というが、現在は大浦港西奥の泊山（とまりやま）のふもとに鎮座する。ここは比較的風波の穏やかな一角である。大浦の外海へ突き出す小岬を「茂梨（もり）」というが、これはササノオ・イソタケルの新羅での根拠地「曾戸茂梨（ソシモリ）」のことだといわれている。ソシモリとは韓国語で「みやこ」のことを言う「ソウル」に相当する。新羅は最初の国号を「徐那伐」とするが（三国史記新羅本紀始祖赫居世居西干条）、これは「セパル」と訓んで「ソウル」のことを言う（前同六興出版完訳本より）。新羅は本来「シンラ、サラ」と訓むべきで、これも原義「ソウル」のことなのである。してみると、韓神新羅神社の祭祀はソウルの地、シンラの地、ソシモリの地、乃ち「茂梨」にこそ原点があったのではないか。

五十猛（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑩ 「グロ」について

三井淳

小正月（こしよがつ）。一月十一日から一月十五日）を迎えると、各家庭の正月のしめなわ飾りやかど松などを持ち寄り、仮屋（かりや）を結び、そのなかで焼却する「どんと焼き」の行事は、日本の各地で現在でも行われているが、大田市五十猛町では、古くからこれを「グロ」と呼んでいる。田の畦（あぜ）を日本書紀では「クロ」と訓んでいて、それは専ら刈った雑草の堆積（たいせき）を指す言葉だった。徳島県では、刈ったスキを肥料にするため積み上げたものを「コエグロ」といつている（十月十六日NHK朝のニュース）。

グロといひクロといひ、これらは「まるい状」を表す擬態語の「グルリ」とか「クルリ」に関係があるらしい。ものをほうり投げて積み重ねると、自然に円状の敷地を基礎に嵩（かさ）が増していく。まずもって、方形とはならない。原初的構築物は大概円の上に成り立っている。「蔵」や「倉」を「クラ」といい、城郭の「郭」を「クルワ」というのも、「クリ」とまわりを囲った、筒状のものに淵源した故だろう。

我が国東洋史学の開祖である白鳥庫吉（しらとりくらきち。一八六五～一九四二）は、韓国語で城邑を表す「忽（コル）」は、日本語の「クルワ」と濃縁であるという。更には、この「クルワ」や「コル」は、モンゴル語で「家」をいう「ゲル」とも関連するともいう（以上岩波書店「白鳥庫吉全集第三巻 227～232 頁より」）。

大モンゴル帝国の故都「カラコルム」、現首都ウランバートルの旧称「クローロン」の「コル」や「クロ」も、「クルワ」や「コル」と同じ発想から生まれた言葉と思われる。有名なモスクワのクレムリン宮殿の「クレ」というのも同疇（どうちゆう）ではないか。

「城寨（クレムリ）」というのは、堀をめぐらし、柵を植えこみ、そのなかに指揮者、武装者、商人、農民、工人などが住み……

司馬遼太郎「ロシアについて」
57～58 頁文春文庫

研究社の英語語源辞典を見ると、ローマの円形格闘場の「コロシウム」の「コロ」や、新聞や雑誌の囲み記事を請う英語の「コラム」の「コラ」、同じく馬の囲い柵の「コラル」の「コラ」も「まるくかこむ」が原義という。

五十猛の仮屋「グロ」とは驚くべき国際語であった可能性が大なのであり、韓神（からかみ）が示現したこの石東の漁村には、悠久（ゆうきゆう）の世界遺産が今なお息づいていると言えよう。

五十猛歴史研究会会員 みついあつし

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑱ 大屋津姫（オオヤツヒメ） 栲津姫（ツマツヒメ）

大屋彦（オオヤビコ）

三井淳

イソタケルのイロモ（同母の妹）とされるオオヤツヒメとツマツヒメは、イソタケルと違い「あまくだり」はしていない。大田市川合町の漢女（からめ）神社の「からめ」はツマツヒメのことといわれる（藤井宗雄「石見国神社記巻一安濃郡」山崎亮翻刻版。「からめ」は「韓女」で韓国の女性を意味する。

イロモとあらばイソタケルと母が同じでなければならぬが、イソタケルはアマツカミであり、スサノオの分身であるから、ツマツヒメとは別次元の神である。従ってイロモという格付けは、日本書紀の誤りなのである。

漢女神社より静間川の下流域に当たる、長久町土江の邇幣姫（にべひめ）神社は、オオヤツヒメとツマツヒメを祭る（大田市誌）。オオヤツヒメはツマツヒメと同格の神だから、これも「からめ」である。この「からめ」とは、スサノオが新羅の女性との間にもうけた女子ということになる。

「続往還を行く④角折（つのおれ）」でも書いたが、現在大屋姫命神社が鎮座する山は、古代「大屋津」の名残りであり、角折（津の折）はその末端の部分で、それから先は海となる。「大屋村勢」に「栲津姫は津の折に鎮座ましましける霊地なりと云い」とあるが、角折のツマツヒメ祭祀など今迄聞いたことがない。今後その証（あかし）が得られるかもしれない。いずれにしろ大屋町では、角折は「大屋津」の一部の名に過ぎない。古語の「ツマ」には「ハシ」の意味があり（岩波古語辞典）、「ツマツ」と「ツノオレ」は同じことなのである。

オオヤツヒメとツマツヒメは二神格であるが、本来は「オオヤツヒメ」という一柱の「韓女神（からめのかみ）」だったのでないか。恐らく、スサノオとイソタケルが分離した時点で、「津」を介して今一つの女神を創作したのだろう。藤井宗雄はツマツヒメにつき、「韓神の后神に坐に就て申すか」（前出石見国神社記）との説もあると言い、「からめ」はスサノオ及びイソタケルの妻であった節（ふし）をにおわす。

古事記には、オオクニヌシをかくまった紀州の大屋彦（オオヤビコ）のエピソードがある。このオオヤビコはイソタケルの別名であるという説（本居宣長「古事記伝」）がある。しかしそのオオヤビコなるは、スサノオより先に生まれている。

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

⑬ イソタケル説話の混入

三井淳

五十猛町には、韓国から植物を招来し、更にはそれを植え回ったのもスサノオであるという伝承がある。国道9号線五十猛隧道（すいどう）上の山を薬師山（くすしやま）というが、スサノオが韓国から薬草を持ち込み、この山に植えたことにちなむという。五十猛町の内陸部である地頭所（じとうしよ）には、唐松ヶ曾根（からまつがそね）と呼ばれる一角がある。この曾根（山の斜面）中腹辺りに、スサノオが韓国から持ち帰った松の太木があったという。

第一回日本書紀イソタケルの条に立ち返れば分かることだが、韓国由来のあらゆる木種（こだね）を列島あまねく植え回ったのはイソタケルに尽きるのであり、スサノオは植林の実行者では決してない。つまり、イソタケルの実績が、いつの間にかスサノオに取って代られているのである。

このことは出雲部にも見られる。出雲市唐川（からかわ）町に「韓竈（からかま）神社」があり、スサノオが新羅に渡り、「植林法」と「からかま」等鉄器文化を日本に伝えたことにちなむという（島根日日新聞平成二十五年九月日曜版）。唐川の南ひと山越した遙堪（よらかん）の阿巢伎（あすき）神社には、同社として韓国伊太氏（からくにいたて）神社が祀られ、祭神をイソタケルノカミとする。すぐ近隣にイソタケルの影響が見られることから、韓竈神社のいわれも、そもそもイソタケルの属性に含まれるものなのだろう。イソタケルの名は、あまりに高名なスサノオの下に埋もれてしまったものか。

以上はイソタケルの説話が、父とされるスサノオにフィードバックした例だが、同様のことは、他の神にも起こっている。

続往還を行く⑦で、八千矛山（やちほこやま）大国主神社について触れたが、そのなかで、「神代のむかし大国主の神出雲よりこま（高句麗、あるいは百済）にわたり給ひ……（中略）……大国主もまたからくに（韓国）よりかへりつきたまひてこの村にしはしゐたまひけむ」という大國隆正（おおぐにたかまさ）の独白を記（しる）した。しかしオオクニヌシが朝鮮半島と往来したなどと、古事記にも日本書紀にも全く見ることが出来ない。これなども、イソタケル説話の影響が作用したものと思われる。

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

㊦ スクナビコナのこと

三井淳

オオクニヌシの神話に不可欠な存在はスクナビコナであり、日本書紀神代上八段一書（あ
るふみ）第六に、その登場の様子が描かれている。

オオクニヌシが出雲の稲作浜（いなさのはま）で食事をしている時、海上から人の声
がした。その声の主（ぬし）は一人の小男（おぐな）であり、白藪（かがみ）の皮で作った
舟に乗り、鷓鴣（さざき）の羽を衣としていた。この「鷓鴣（さざき）」に注目したが、
前述の如く水野祐博士である（㊦参）。

同郡（隠岐の周吉郡）に、「従四位雀雄明神」というのがある。この「雀」はかの仁徳
天皇の諱、「大雀命（おおささきのみこと）。日本書紀では大鷓鴣尊」の「ササキ」、ま
た若雀命（武烈天皇）の「ササキ」であって、雀を「ススメ」というのも通音である。
それを参照にすれば、「雀雄明神」も「スサヲ」の音を写したものであると思われるの
である。

水野祐著 八雲書房「出雲神話」二四九頁

この「スサヲ」とは、㊦「スサノオの意味するもの」でも述べたように、水野論で言え
ば「素戔嗚」本来の訓み方であり、新羅の伝説的王号「次次雄」を言うものとなる。㊦「再
びスサノオとイソタケル」では、「スサノオ」「イソタケル」は一体のものであって、本体
は「イソタケル」の方にあるというその所以（ゆえん）を説明した。ならば、「サザキ（サ
サキ）」を身にまとう「スクナビコナ」なるは「スサヲ」つまり「スサノオ」を意味し、「ス
サノオ」はすなわち「イソタケル」なのである。

日本書紀の「父スサノオ、子イソタケル」の関係は、「父」とオオクニヌシの「大」、「子」
とスクナビコナの「少」に当てはめることが出来る。スクナビコナはオオクニヌシ国作り
の重要なパートナーとして描かれる。イソタケルは植林の神であるが、同時に船の神、航
海の神でもある。五十猛歴史研究会の調べでは、イソタケル祭祀は北は秋田宮城に及び、
全国では三百を数える。

加羅より駆逐された人々が、海から列島各地の川をさかのぼり、不毛の山野を切り開い
て行った、さような埋もれたる秘史が、イソタケル説話の背後にあったのではないか。

五十猛神（いそたけるのかみ）の真相に迫る

21 八岐大蛇（ヤマタノオロチ）退治のこと 〈完〉

三井淳

出雲神話の白眉は、鳥上山中でのスサノオのヤマタノオロチ退治である。

石見や出雲の浦々には竜蛇（りゅうじゃ）信仰というものがあり、上田常一（かみたつねいち）博士の「竜蛇さんのすべて」（昭和25年園山書店）によれば、大陸の季節風が吹きすさぶ旧暦の十月、いわゆる神在月の「お忌み荒れ」の頃になると、決まって南海産のセグロウミヘビが海岸に打ち上げられるという。浦々ではこれを竜神（りゅうじん）の示現と崇め、トグロ巻きの剝製（はくせい）にして神社に奉納し豊漁を祈願した。神在月の「神迎（かんむか）え」神事では、神籬（ひもろぎ）の先頭が竜蛇（竜神）である。

この竜蛇が、斐伊川をさかのぼって鳥上に達する過程で、ヤマタノオロチに化けたという言い伝えが、美保関町の笠浦（かさうら）にある（「竜蛇さんのすべて」一五三〜一五四頁）。五十猛町大浦では、竜神は新羅からの使者とも伝えられている。してみれば、ヤマタノオロチなるは、新羅より海を渡り、そのまま斐伊川をさかのぼって行った、ということになる。

古事記では、ヤマタノオロチを「高志（こし）の八俣遠呂知」と表記している。高志は「越」で、北陸由来の種族をいい、鳥上に先住していちはやく製鉄業を起こし、その環境破壊のすさまじさが、ヤマタノオロチ説話に反映されたのだという専（もっぱ）らの説がある。学研漢字源には、「越」に「ぐ」とはみ出て際立つ」の意味があり、岩波古語辞典では、「ヲ（オ）ロチ」につき「激しい勢いのあるもの」とある。「ヤマタ」は「多い」の形容と考えると、「ヤマタノオロチ」の素直な解釈とは、「際立って勢いのある集団」となるのではないか。

新羅原流のウミヘビがヤマタノオロチの正体とあらば、それは、加羅にてヤマトを悉（ことごと）く打ち破った新羅の投影ということになるのではないか。

ヤマタノオロチ退治とは現実のはなしではなく、せめて新羅に一矢報いるべき創作された絵空事に過ぎなかったのかもしれない。「記・紀」の編纂者の立場としては、大敗北を素直に認める訳にはいかなかったか。